

「チャイルドマネージメント」 — 小児の新しい見方 —

座長：中 田 稔

日本歯科大学新潟歯学部小児歯科学講座

教授 下 岡 正 八



■ 略歴

昭和40年 日本歯科大学歯学部卒業
昭和47年 日本歯科大学歯学部大学院修了
昭和48年 日本歯科大学新潟歯学部助教授(小児歯科学)
昭和52年 日本歯科大学新潟歯学部教授(小児歯科学)
平成5年 日本歯科大学新潟歯学部附属病院副院長

■ 現在

日本小児歯科学会常務理事
日本歯科心身医学会理事
日本障害者歯科学会理事

医学の分野では、医療が臓器別・疾患別に進歩、発展しているが、一方、心身両面からのアプローチ研究も盛んに行われている。しかし、歯科の分野では、患者の「心」の問題についてはほとんど二次・三次的なものとして取り扱われているのが現状である。

そのためとは言わないが、21世紀に入ろうとしている現在、「取り扱い」については、20世紀中頃の米国の小児歯科を模倣した技法が臨床の中で応用されている。これらの技法の多くが、現在米国の小児歯科の分野では使用されていない。その中で、わが国では最近になってようやく行動科学に着目するようになってきた。しかし、行動科学の小児歯科への導入については、第18回秋季日本小児歯科学会（昭和55年）に演者が教育講演を行っている。

最近、心理学の中で認知心理学が流行している。この意味は、従来の西欧文化の根底にあるデカルト的二元論、つまり、人間を「心」と「身」に分けた機械論的な考えでは人の持つ本来の姿を捉えきれないという批判がなされるようになったからであろう。そこで、「心」と「身」を一緒にした本来の人間学として研究をすべきであるという考え方が現れてきた。これは大変によいことである。しかし、この認識の仕方を見ると、結局、人が住む環境を人に対する「刺激」として位置づけし、現在の自然科学の中の中枢支配説から脱却していないことが解る。この意味は、中枢支配説を否定することではない。

現在の自然科学の分野で行われている全ての研究は、仮説（暗黙の前提ないし前提条件）の基で成り立っている。それにも関わらず、仮説が研究の前面から消えて不変項になってしまい、結果がいつの間にかヒトにより実体として信じられてしまっている。

る。

これらに対し、まったく新しい見方、考え方として、人間行動をその生態系の中でありのまま捉えようとする生態学的心理学が再び台頭してきた。米国の知覚心理学者のギブソン (J. J. Gibson) は、視覚研究の分野において従来の実験室的研究を改め、相互に依存し合う生体と環境とを一体の存在として見ていくべきであると提唱し、“アフォーダンス” という語を作り、心理学に新しい方向性を提唱した。

教育講演では、これらの概念や理論自体について、従来の「研究計画の立案や結果の解釈において、生態学的な妥当性を確保する必要がある」と言われている点を重要視し、小児歯科学の中で行われてきた数少ない小児の取り扱いに関する研究や、演者が研究してきた結果について再考察を試み、新しい小児の見方について提言したい。

小児歯科に応用される心理学の展開

